

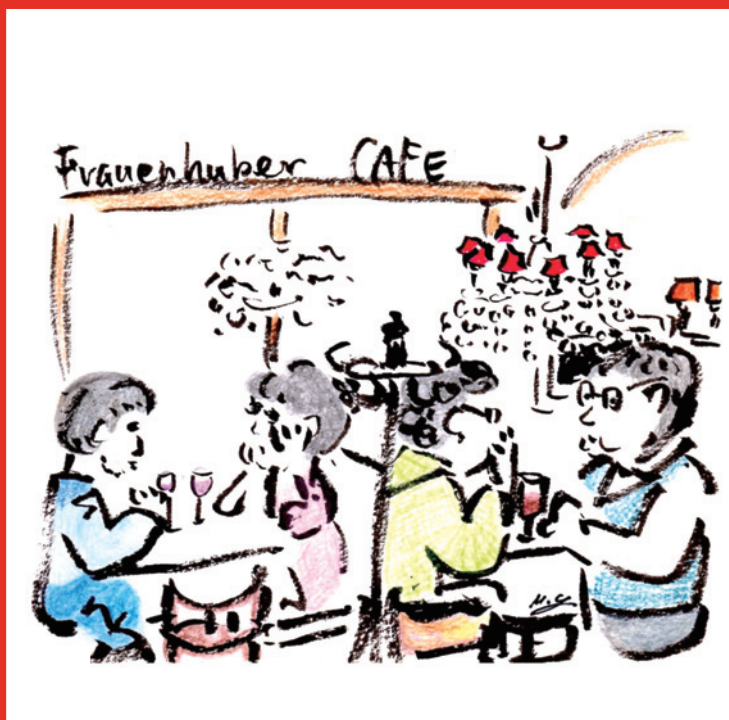
日本エッセイスト・クラブ

2021 冬

NO.73-II

会報

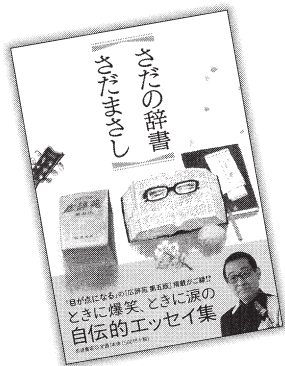
第11回応募エッセー特集



第69回 日本エッセイスト・クラブ賞 受賞

さだの辞書

さだまさし



ときに爆笑、
ときに涙の自伝的エッセイ集

「目が点になる」の『広辞苑 第五版』収録をご縁に、
家族・故郷・ご先祖様、友・仲間・恩人、歴史・
土地・希望、本・音楽・映画を25の三題噺で語る。
温かな人柄とユーモアとセンスと……。多芸多才
の秘密も見えてくる。

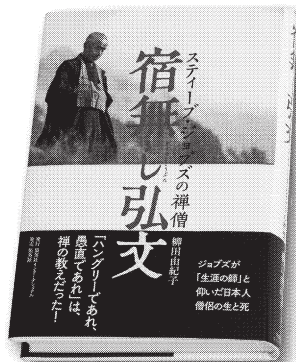
四六判・定価1650円

岩波書店



〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
<http://www.iwanami.co.jp/>

第69回 日本エッセイスト・クラブ賞受賞！



『宿無し弘文 スティーブ・ジョブズの禅僧』

柳田由紀子 著



スティーブ・ジョブズが
生涯の師と仰いだ日本人僧——
その生涯を追い求める
骨太ノンフィクション！

定価2,090円(税込)

集英社インターナショナル

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町 1-5-18
<https://www.shueisha-int.co.jp/>

日本エッセイスト・クラブ

会報

2021 冬

題字 阿部 眞之助
表紙 よしだみどり
カット

目次

応募エッセー特集

2

事務局から

28

日本エッセイスト・クラブ定款

30

会員名

32

応募エッセー特集

今秋、広く会員の皆さまのエッセーを募集したところ、9編の作品が寄せられました。会員のエッセー募集は、当クラブ創設60周年記念で初めて行われて以来、今年で11回目です。本会報には、今回応募の全作品を掲載します。
なお、一昨年からは会報冬号は電子版として刊行しております。

題名

筆者（五十音順）

詩人・神保光太郎とハンス・カロツサのこと

飯塚 恆雄

八月という月に想う

岡 佳津子

はるかなるナイチンゲール

塩谷 靖子

へふるさとを想う

『みんなでパスかる！』

百歳老人と魔女・山姥

神様がくれたような

猫

のちの世に残すもの

砂原 和雄

高階 経和

松田 宣子

桃井 恒和

吉岡 純子

吉原 賢二

詩人・神保光太郎と ハンス・カロツサのこと

飯塚 恆雄

『井伏鱒二自選集』の中に、戦時の文士たちの受難を書いた〈続徴用中の見聞〉がある。

多くの作家たちが軍の宣伝広報のために否応なしに徴用された。ドイツ軍に「ペン部隊」という組織があつて、占領地域の文化工作のために文化人を利用した。日本はこれを真似たわけだが、第一次徴用のマレー組だけでも、百二十

人（音楽家、画家なども含む）もいたという。その中に井伏も、詩人・神保光太郎もいた。

「神保さんは日大のドイツ文学の先生をしていたところ徴用された」と書いてあるが、戦後も芸術学部の主任教授としてドイツ語も教えていた。ぼくはこの学校の第二外国語の選択で、いいかげんにドイツ語を選んだが、そのことで神保さんに出会えた。たしか卒論の相談に行つたのだと思うが、浦和の別所沼に近い神保家まで押し掛けたこともあった。和風の母屋からL字型に庭に突き出た応接間の佇まいが懐かしい。それでも当時のぼくはヘイヒ・リーベ・デ

イツヒよりジュテムの方がかつこよかったかもしれない」と悔やんだりしていた。その程度の軽薄な選択なので、とうていドイツ語を物にできなかったが、神保さんのおかげでハンス・カロツサに出会えた。それからは「ドクトル・ビュルゲルの運命」とか「ルーマニア日記」など、翻訳本を片っ端から読んだ。

カロツサについてはこんな非文学的な思い出がある。ぼくがレコード会社に紛れ込んで四、五年たったころ、『宮城テレビ』東京支社長のS

さんから難題を持ちかけられた。

Sさんは元文化放送のプロデューサーで、そのころのぼくはアルバイトでラジオの台本を書かせてもらった。そんな大変お世話になったSさんの話は、宮城テレビ主催の「ある大物歌手の公演」を事務所が突然キャンセルしてきたと言うのだ。仙台公演は二か月後でテレビ告知もスタートしていた。Sさんは藁にもすがる思いだったのだろうが、ぼくには手に余るトラブルだった。それでも苦し紛れに、その場で思いついたヒントを漏らした。

当時の『日本レコード大賞』審査委員にHと言う音楽評論家がいる、芸能プロダクションにも大きな影響力があったので、「何とか人脈をたどって、それなりの謝礼を渡したら、なんとかなるかもしれない」と言ったのだ。ところがSさんは、僕の言ったことをそのまま実行に移した。そうして、この裏技がみごとに功を奏して「コンサート」を復活させた。

公演が無事に終わってからSさんから電話があつて「上司のBという常務取締役と一緒に食事したいといっているので、付き合ってほしい」

と言ってきた。せっぱつまつた品性のないアドヴァイスで偉い人から礼を言われても困ると思つたが、受けざるを得なかつた。

築地の高級天ぷら屋の席で初めて会つたBさんは「ぼくは以前、大学でドイツ語の講師をしていたのでゲーハーというドイツ風のニックネームがあるんです」そう言つてハゲ頭をなでた。それからやつと話が馴染んできたが「あなたは文学青年だと聞いていますが、海外の作家ではどんな人が好きですか」と訊かれた。このとき、ついカロツサの名を出してしまつたのは、Bさんにへつらつたわけではない。そのころのぼくは「カロツサ全集」の三分の一を好きな女の子に上げてしまつて、痛く後悔していた。正確に言えば貸したつもりだったが、お互いに冷えてしまつてからは未練がましく「返してほしい」とは言えなかつた。そんな悔しさもあつて、ついカロツサの名前が出てしまつたのだ。ところがBさんは、突然すつくと立ち上がつて、「きみ、握手しよう」といった。隣席の人たちも驚いて見上げていたが、Bさんは委細かまわず、真からうれしそうにぼくの手を握つて、しばらく離

さなかった。

こんな恥かしい話と裏腹に、ハンス・カロツサはどうしても詩人・神保光太郎と重なり合う。ほとんどがドイツ語を解せない学生たちをしり目に「カロツサ詩集」の原書を、白髪を震わせながら朗読する詩人の姿が、今も昨日のように浮かんでくる。

いづか・つねお 音楽プロデューサーとして伊東ゆかり、財津和夫、ピチカート・ファイブ、イエロー・モンキーなどを担当。角川映画『野生の証明』『復活の日』などの音楽を担当。主な著書に『ぼびゅらりてぃーのレッスン』（シンコー）、『ニッポンのうた漂流記』（河出書房新社）、『村上春樹の聴き方』（角川文庫）、『レコード・マンの世紀』（愛育社）などがある。

八月という月に想う

岡 佳津子

八月は私の誕生月である。亡くなった二つ違いの兄となんとお誕生日は一緒。およそ九十年前、エアコンもなかった時代に私たちを産んだ母は大変だったろう。

今年、暑さとコロナの中で八月を迎えた。何百年も前から、ペスト、天然痘、スペイン風邪と世界を震撼とさせた病気はあった。その頃は、

病気の正体が分からなかったから、ただ恐れおののいて神仏に縋ったり、アマビエなどいうものにまで頼ったりした。今回のコロナの正体はわかってる。ただ、敵もさるもの。自分たちも生き残るために、手を変え、形を変えて、これでもかと人間に挑んできた。今ではデルタ株からラムダ株、さらにミュー株までいるそうだし。

賛否両論の中、オリンピックが開かれた。アスリートたちの努力、医療関係者とボランティアたちのバックアップもあって、無観客で開かれて、元気を分けてもらえた。コロナ自体の生き残りの真剣さに比べて、人間たちは真剣ではないと感じた。

知人から、俳文エッセイ集を貰った。俳句に添えてエッセイを綴ってある。その中に心を惹かれた話があった。

八月や 六日 九日 十五日

という句に添えた話だ。この句は、その知人の作ではない。投句して賞をもらった。ところが先句があるといわれて賞は取り下げられ、非難もされた。調べてみると、同じ句は多くの人が詠んでいたという話である。

あの八月六日、私は原爆の熱風と音を感じ、キノコ雲をこの目で見ている。爆心地近くに住んでいた伯父夫婦を亡くした。九日は長崎に投下された日、そして十五日は戦争が終わった日、ひところは、年配者の中には「戦争に負けた日」と言う人もいた。先句があろうがなろうが、私には日本人なら誰もが詠み、理解できる句だと思っている。

先日の誕生日に、九十七歳になる友人からバースデーカードを貰った。何年か前に書いた私のエッセイの中の「戦争の棘」という作品を読んだ「戦争を知らない」お孫さんの感想文が同封してあった。終戦直前の六月、沖繩は最後の時を迎えていた。日本本国へ最後の打電をした後に玉碎している。

その時の日本軍の総司令官、太田中将のお嬢さんが隣のクラスにいと知った。女学校に入學して間もない私たちは隣のクラスに覗きにいて、「どの子?」と聞いた。大人になって、その言動が棘のように私の心を刺す。大きな傷口は痕が見えるから目にする度に思い出せる。でも、棘の痕は見えないから、たまにその部分に

触れるとキュツと痛い。そんな話だったように思う。

人は誰でも傷痕が残るほどではないにしても、知らないうちに傷つけている。棘で刺してもいい。今の時代、人種、ジェンダー、ヘイトなど、刺した者は忘れても、刺されたほうは、傷跡となつてチクチクと痛む。

八月は、私にとってそんな棘のことを想う月でもある。

おか・かつこ 一九三二年、広島県呉市生まれ。東京女子大学卒。よみうり、西武カルチャ―センター講師。著書は『喜寿は輝寿』（文芸社）原爆や空襲体験を綴った『思い出ポロポロ』（文芸社）など。知らない町歩きが大好きなので、コロナ自粛の間に纏めたフォト&エッセイ『ちよつと寄り道、目の散歩』を自画自賛しながら眺めているところです。

はるかなる ナイチンゲール

塩谷 靖子

あのときの感動は、20年経った今でも色褪せることなくよみがえってくる。

2001年5月、バード・ウォッチング&リスニング旅行と称して、知人数人と英国ケンブリッジ近郊に1週間ほど滞在したときのことだった。その朝も、自然保護区に向かうべくホテルを出た。朝露に濡れたライラックやブルーベ

ルの咲く道を通って街に出ると、ビルの上や街路樹の枝で鳴き交わすブラックバードの大きくて朗らかな声が、人々や車の雑踏にも負けずに響いていた。日本の森にいるクロツグミと同じような歌声だが、こんな都会でさえずるのを聞いたのは初めてだった。ビートルズの「ブラックバード」が重なって聞こえてくるような気がした。他にも、日本のカワラヒワに似たグリーンフィンチや、ミソサザイに似たレンなどが歌っていた。薄曇る初夏の風は冷たかったが、今日はどんな鳥に会えるのかという期待でいっぱいだった。

白樺林の中を進んでいたときのことだった。わずか2メートルほどの所にある枝で、突然、1羽の鳥がさえずり始めた。びっくりするほど大きくて華やかな声だった。どこからか「ナイティンゲール」というささやき声が聞こえた。そこには、シャッターチャンスを狙う現地のバードウォッチャーたちが待ち構えていたのだ。だが、彼らにとっても、こんなに間近にナイチンゲールの声を聞くのは珍しいことらしく、話し声もシャッター音も聞こえない。私たちも息

をするのも忘れて聞き入った。その静寂の中をナイチンゲールの声だけが高らかに響き渡った。コロラトウーラソプラノにも似た華やかさとともに、そこには、何かに対する感動を人間が必死になって歌い上げているような迫力があった。

例えば、雪国の長い冬が終わり、雪解け水を集めて滔々と流れる川音とともに次々と花が咲くときの感動。突然視力を取り戻した人が青空を仰いだ瞬間の感動。今であれば、「世界中を飛び交う得体の知れない病原体の根絶に成功した」とのニュースが流れたときの感動にも通じるかもしれない。ほとぼしる想いが歌い上げられた後に再び静寂が戻ると、聴衆の間に溜息が広がった。

滞在中、たくさんの方に会ったが、その多くの多くは日本にいる鳥のどれかに似ていた。だが、これまでナイチンゲールに似た声を日本で聞いたことはない。

ナイチンゲールの声の録音もいろいろ出回ってはいるが、心を揺さぶられるような力強さと繊細さと輝かしさは、生でなければ得られない

ように思う。ヨーロッパへ行ったのは、あのときの一度だけだが、偶然にもナイチンゲールに出会えたことをラッキーだと思っている。

ナイチンゲールには、その名のとおり「夜の鳥」というイメージがあり、日本語ではサヨナキドリなどと訳される。実際、月夜、早朝、薄暮などにさえずることが多いらしいが、曇りがちな日中にさえずることもあるという。

ナイチンゲールは、シューベルトをはじめとするドイツ歌曲、特にセラナーデに「ナハティガル」として、しばしば登場する。だが、あのダイナミックな声と、月光の中で愛をささやくセラナーデとは、なんだかミスマッチな気がする。日本の場合、これに当たるのがホトトギスだ。ホトトギスも、昼となく夜となく、はるか遠くまで聞こえる声で情熱的に歌う。そして、平安の昔から、恋の歌の中にしばしば詠まれてきた。おそらく、宵闇や月光の中では、繊細なさえずりよりも、ナイチンゲールやホトトギスのように力強く音楽的なさえずりのほうが、恋心を誘うのかもしれない。

（毎日新聞社発行「点字毎日」（点字版2021年10月10日号 活字版10月14日号）に掲載されたものです）

しおのや・のぶこ 声楽家。1943年生まれ。7歳で失明。東京教育大学附属盲学校を経て、東京女子大学文理学部数理学科卒業。プログラマーとして日本ユニシスに入社。後に声楽を始める。東京文化会館小ホールでのリサイタル等、出演多数。「奏楽堂日本歌曲コンクール」入選、「太陽カンツォーネコンクール」（クラシック部門）第1位、「全日本ソリストコンテスト」入賞、他。CDに『慕わしき面影』他。エッセイストとしても活動。「小諸・藤村文学賞」入選、「文芸思潮エッセイ賞」最優秀賞、他。『ベスト・エッセイ集』（文藝春秋）、『日経新聞文化欄』等にエッセイが掲載される。著書に、第58回日本エッセイスト・クラブ賞最終候補作『寄り道人生で拾ったもの』（小学館）。東京在住。ホームページに、コンサート予定やエッセイを掲載。

<https://www.nobuko-soprano.jp/>

へふるさとを想う

砂原 和雄

出身地の新宮をこよなく愛し、『望郷の詩人』
と呼ばれる佐藤春夫は「恋しきや何ぞわが古郷」
（望郷五月歌）と詠んだ。また島崎藤村はふる
さとについて、

血に つながるふるさと
心に つながるふるさと
言葉につながるふるさと

と、語っている。

さて、時代とともに「へふるさと」を想う気持ちも変化しているように思われるが、どうだろうか。

八十歳を過ぎたころから人生を振り返り、「ふるさととは……」と思いを馳せるようになった。そのうち、「ふるさととは生まれ育ったところ」というより、「長年にわたって住み馴れたところ」との思いをいだくようになった。

わたしは奥飛驒の古川町に生まれ、地元の高校を出て上京した。その後、大学を卒業して就職し、数年間の地方勤務を経て東京に戻ったとき、東京に近い横浜に住居を構えることにした。住み始めたのは公営住宅であったが、港に近く休日には山下公園や港の見える丘、元町、それに中華街のあたりを散策するうちに徐々に横浜の生活に馴染んできた。

そうしたなか、横浜で結婚し家を建て暮らすようになってもう半世紀になる。横浜で生まれ育ったふたりの子供もそれぞれ近くに家庭を築いている。人生の大半を過ごしこの地にすっかり馴染んできたからだろうか、「横浜はいまやふ

るさと」の気持ちが強まっている。三年まえ妻が天国に召されるとき、「俺も入るのだから近くにしてくれ」との長男の言葉を受け、自宅に程近い墓地に墓を建てた。そのとき、この地は「生命をつなぐ場所」であり、「魂のふるさと」だと思った。

ふたりの子供の家族と墓前に立つとき、元気だったころの妻を想い浮かべる。現役で働いていたころ家は「安らぎ」の場所であった。外出先から帰宅すると玄関先で「お帰りなさい」と妻に迎えられ、ほっとした。家は「帰る場所」であるとの思いはひとり暮らしとなった今も変わりない。

家を建てた場所は住宅地として開発された田園都市線の沿線で、最寄りの駅に近く都心まで三十分。周辺に開発前の樹林を残し整備した公園が二か所ある。その一つの公園には夏に睡蓮の咲く大きな池があり、隣接して樹木の茂る高い丘がある。晴れた日に丘に登れば頂上の東側に富士山が眺められる。また西側を望めば学生のところたびたび訪問し聲咳に接した佐藤春夫が若いころ住み、小説『田園の憂鬱』の舞台と

なった村落が見える。頂上に立つたびに「またおいで」と優しく迎えてくれた春夫との出会いを思いだす。

もう一つの公園は最寄りの駅の近くで、こじんまりした池の向こうに大きな松や杉の木が茂っている。樹木の間をシジュウカラやオナガドリが飛び交うのが見え、ときにはカワセミが飛来し目を楽しませてくれる。池の周辺には紫陽花や花水木、紅白の梅など花の咲く木が植えられており、また季節の草花が多く見られる。毎日の散歩の途中にベンチに掛けて小鳥の声に耳を傾け、咲いたばかりの草花を眺めながら想いに耽る。ふと、「空の鳥を見よ、野の花を見よ」との聖書の一節を思い浮かべる。いつでも気軽にに行ける公園が自宅近くにあるのはよいと思っている。

また、月に一回は横浜港沿いの山下公園へでかけ、海を眺めながらいつとき過ぎている。この辺りは近くに住んでいた若いころ子どもたちとよく遊んだ場所で、海の上を舞うカモメ、港を出て行く大型船を見つめているとロマンを駆り立てられた若いころの情景が浮かんでくる。

一方、「ふるさと」は遠きにありて思ふもの」(室生犀星の詩の一節)というが、生まれ育った奥飛驒を忘れたわけではない。父母はとうに亡くなり、月に一度は電話をくれた兄も昨年末に他界したこともあり、何となく遠くなった感はないが、一緒に暮らした父母の面影は実家周辺の「山青き、水清き」光景と重なり心に深く残っている。父の肩車やはじめて上京するとき「自分でいいと思う道を歩け」と駄頭で見送った母の姿は今も昨日のことのように臉に浮かぶ。奥飛驒が「心のふるさと」であることはいつまでも変わらないだろう。

そもそも半世紀まえに建てた家は、住宅建設の専門家に描いてもらった図面を実家近くの大工に送り、その後二人の大工と左官が二か月余り泊りがけで来て建てたものだ。家の軒下の腕木に『雲』の飾りを彫り込んだ飛驒の匠で知られる飛驒古川伝統のつくりである。この家に住んでいるかぎり奥飛驒は忘れようにも忘れられない。

すなはら・かずお 岐阜県飛驒市生まれ。上京して間もなく佐藤春夫に出会い、学生の間度々訪問、警咳に接する。産経新聞論説委員、清水建設社長室、明海大学非常勤講師を経て、文筆活動に専念。日本記者クラブ会員。毎月一回の句会に参加、また写真を付けたブログを書いている。著書に、『日本銀行物語―日銀マンの光と影』(泰流社)、『ザ・バンク 最先端を開く三和マン』(産経新聞社)、『炎の森へ』(日本経済新聞出版)、『魂の刻』(静人舎)、『夢、遙か』(静人舎) など。

『みんなでパスかる!』

高階 經和

NHKの特別番組『みんなでパスかる!』(二〇二二年五月三日)をみた。各分野から選ばれた五名の参加者にオンラインで司会者が「今日は皆さんでパスかりましょう」と話し始めると、参加者の一人が「パスかるって何ですか? わたしにはよく分からないのですが…」司会者「ああそうでした。『パスカルの原理』というの

はご存知ですよ? 中学校の頃に物理で習ったと思うのですが」参加者「ええ」と全員スクリーンの中で頷いている。「パスカルの原理とは密閉物体に加わった力は、その力を変えることなく全体に伝わるという理論でした。今日はその原理を利用して三つの場面で、皆さんに考えていただき、一つのテーマについて色々な解決法を考えて頂こうと思っています。つまり「発想の転換のコツ」を考えて行こうという企画なのです。」別の参加者から「つまり発想ゲームですね?」

そこに登場したのが、漫画家を連想させるベレー帽をかぶり眼鏡をかけた丸顔で小太りの女性、ホワイト・ボードの前に立ち「わたしは『カンファレンス・イラストレータ』といまして、色んな会社に出向いて行き、会議の内容を皆さんの前でホワイト・ボードにイラストで描いていくのです。そのイラストに短いコメントを付けていくのが私の仕事です」と自己紹介した。つまり参加者の発想を目の前でイラストに描き、どの発想が一番良いかということを五名の参加者に決めさせるというユニークな番組

であった。

(一)「最初のテーマは、親子が五人連れでステーキ・レストランに行った時、子供は料理のお肉がくるまでジツとしていない。どうすれば、子供をテーブルにステーキがくるまで静かにさせることができるか？」と司会者が問いかける。参加者はそれぞれの立場で「漫画の本を読ませればいい」「ゲームをさせればいい」「音楽を聴かせればいい」などの意見を出したのだが参加者の一人は明らかに小学生であった。「ぼくは料理の始まりから出来上がりまでを大型のテレビの画面で見たい」と発言した。結局、この参加者の発想が取り上げられてレストランには大型のスクリーンが設置された結果、問題は解決された。

(二)「上高地にあるホテルの支配人が、どうすれば車椅子で来られるお客様に、河原の砂利道を通り周りの景色を眺めて楽しんでもらえるかと考え、その問題を解決しました」

「さて、皆さんどうして解決したかと思われるますか？」参加者たちは色んな意見を言い出し

たが、正しい答えは出なかった。しかし一人の女性参加者が「人力車を借りればいいと思います」という発想がそれに最も近いものであった。ホテルの支配人が自ら考え作り出したのは、右左二本のL字型になった棒を車いすの前輪を支えているシャフトに取り付けると、直ちに人力車に変身した。この支配人は「日本中のホテルでもこの方法を使えば、車椅子で来られるお客様も、もっと旅行を楽しんで頂けると思います」と支配人自ら彼の発想で出来上がった「インスタント人力車」に乗り、ホテルの従業員に曳いてもらっている光景が映され「この発想はやがて社会貢献に役立つものになると確信しています」と誇らしげに語っていた。

(三)「東北地方のこけし人形は高度成長期には、全国に知れ渡り、製作が追い付かないほどの売れ行きであったが、その後、伝統工芸のこけし人形は僅かな地震の揺れでも頭部が重すぎて転倒しやすいこともあって、人気は落ちてしまい殆ど売れなくなってしまうた。しかし、それをあることに気付き一気に挽回させた。その方法

とは？」

「さて、皆さんはどうやってこの問題を解決したと思いますか？」と司会者が言い出すと、或る参加者は「形を変えないで問題を解決するためには底に重しを入れて重心を下げれば良いのでは？」また参加者は「現在の伝統的な形にとらわれず、形を変えた方が良いのでは」と様々な意見がでた。その意見の一部始終をイラストレーターがホワイト・ボードにイラストで素早く描いた光景はさすがにプロだと思いましたが、わたしはNHK参加者が企画した番組の中で、現在一番人気の高い『チコちゃんに叱られる！』よりも人気が出るのではと思った。その理由は、チコちゃんの質問に回答者が持っている知識で答えるという受動的番組であるが、『みんなでパスかる！』は、反対に参加者がそれぞれの意見を出し合って「三人寄れば文殊の知恵」という思考過程を見ることができ、参加者が積極的にならなければ良いかを考えさせるスタンスの番組である。

司会者が「あるこけし人形制作者が、フランス人形は揺れて人形が倒れた時、ライトが付く

ようになっていることに気づき、こけし人形にも使えると思った。こうして現在のこけし人形は倒れたり、揺れを感じたりすると底のライトが付く様になっています。」とコメントした。わたしは久し振りに良いテレビ番組だと思った。興味ある人との対話や、テレビ番組などは簡単なメモを取ることにしているが、殆どのテレビ局は「旅行番組」「料理番組」「スポーツ番組」それに「お笑い番組」などを放映している。決して批判する心算はないが、似たり寄ったりであまり面白くない。知的な好奇心をくすぐるような番組を望んでいるのは、わたし一人だけではない。今回の『みんなでパスかる！』は久し振りに良い番組だとおもったので（恐らく脳力の豊かな若い企画立案者や、ディレクターやスタッフが綿密に練り上げて放映に至ったのであろう）、途中からメモを取り出し概略を書き留めた。そのメモをもとにこの番組を文章に纏めてみた。

コロナ禍はまだ続くだろうが、もしシャーロック・ホームズ探偵の原作者であるコナン・ドイル（彼は内科医として開業していたが、彼の

友人の外科医ジョーゼフ・ベルが周到な推理手法、そして診断能力を発揮していたのを傍でみて、彼をワトソン博士として「シャーロック・ホームズ探偵」シリーズに登場させた）に相談すれば、今日の様にAI（人工知能）やVR（仮想現実）などが幅を利かせる時代になったが、彼は喜んで「シャーロック・ホームズ」の知的能力を蘇らせ「パスカルの原理」ではないが、彼独特の推理分析法で様々な問題を解決してくれるのではないだろうか。

たかしな・つねかず 一九二九年大阪市生まれ。現在（公社）臨床心臓病学教育研究会理事長。五四年神戸医大（現神戸大学医学部）を卒業。五八年より四年間、アメリカ・ニューオーリンズ市のあるチュレーン大学に留学。六二年帰国後、大阪にある淀川キリスト教病院循環器科科长。六九年より一七年間、神戸大学医学部講師、八五年に社団法人臨床心臓病学教育研究会を設立。その後、チュレーン大学医学部、マイアミ大学医学部、スペインのバルセロナ大学医学部やマドリッド医科大学、アリゾナ大学、

ドイツのライプツヒ大学医学部などへ客員教授として招かれ、九七年に心臓病患者シミュレータ「イチロー君」を開発した。著書に『もう一人のイチロー物語』『あなたの症状は』『心臓病の理解のために』『未来への軌跡』など多数の一般叢書も執筆。二〇〇二年、日本心臓病学会から教育貢献賞、〇三年、日本医学教育学会から日野原賞を受賞した。



百歳老人と魔女・山姥

松田 宣子

百歳以上の高齢者は八万六千五百十人。その八八％は女性。百歳高齢者として表彰されるのは四万三千六百三十三人。「敬老の日」（今年は九月二十日）を前に、厚生労働省が発表した数字に、思わず驚き、記憶は半世紀余りの月日を後戻りした。「これから、日本は間違いなく、欧米なみの高齢化社会になります。そのための、

大事な法律ですからね」

一九六三年七月制定の老人福祉法を、厚生省（当時）の初代老人福祉専門官は駆け出し記者の私に、自慢気に強調した。

当時、東京オリンピックで日本中が沸き立っていた。急ピッチで仕上げた東海道新幹線や東京モノレールの開通。さらに、貿易為替の自由化、OECD（経済協力開発機構）への加盟と、日本も先進国に仲間入りできると、政、官、民ともはしゃいでいた。高齢者（六十五歳以上）が人口に占める割合は六％余り。百歳以上は、一九六三年ではわずか百五十三人。翌六四年でも百九十一人。老いる日本の姿はまだ、ぴんと来るはずもなかった。百歳老人は、十分に希少価値の存在だった。

「よし。百歳の人をインタビューして正月紙面を飾ろう！」。デスクや部長の掛け声に、東京在住の百歳以上の高齢者名簿を厚生省に紹介してもらった。プライバシー保護を気にしない、呑気な時世だった。といっても、東京在住の人は数人しかない。片端から電話するが、とてもインタビューには応じられる健康状態ではな

いと、家族が断る。やっと、一人の女性が取材にに応じてくれたものの、ほとんど会話のやりとりにならない。カメラさんがアングルを工夫して無事、撮り終えた。企画ものが多い正月紙面は、早めに仕込む。どうか健在でおられますように。はらはらしながら掲載日を待った。

それから、半世紀以上を経て、いま、日本人の約三人に一人が高齢者で、世界一の長寿国。最高齢者は百十八歳の田中カ子さん。百歳以上でも現役の職業人もいて、百歳老人の群像も相当に変わった。世界の長生き競争では、日本は強豪だが、個人戦では、フランスのジャンヌ・カルマンさんの百二十二歳（一九九七年死去）の記録がまだ、破られていない。

「今世紀中に長寿記録は百三十歳を超える」と、アメリカ・ワシントン大学の研究者の予測も出ている。カルマンさんの記録もやがて、破られるのだろう。

不老長寿は人類の願いともいえ、iPS細胞による再生医療の行く末が熱く期待される所以だろう。しかし、私は違った面から、寿命の伸びをどぎまぎしてみている。実は、高齢者の取

材の延長から脱線して、魔女や山姥といった、童話や昔話、民話に出てくる超人的な老女に関心を奪われてしまった。

魔女や山姥は、単に童話や昔話の世界に住むだけではなく、その背景には、魔女狩りや姥捨てという史実があった。魔女狩りは一六、七世紀を頂点としてヨーロッパで火の手が上がり、一時、アメリカにも飛び火した。その詳細はここでは言及しないが、多くは女性が犠牲になった。村や部族の困窮状態を乗り越えるために、棄老した事実は広く世界にある。捨てられても、男より皮下脂肪が多いからか、生活術にたけているからか、女の方が生き延びた。それは、アラスカ先住民の伝説をもとにしたヴェルマ・ウオーリス『ふたりの老女』（草思社）や、天願大介監督『デン德拉』（東映）が想像の手がかりになる。グリム童話『ヘンゼルとグレーテル』の魔女も、捨てられた、或いは逃亡した老女だと、私は解釈している。魔女は最後にかまどで焼かれ、財産を奪われる。むしろ、被害者といっている。

現在は、それこそ老人福祉法もあり、高齢者

の福祉施設も、介護保険制度もある。コロナワ
クチンも高齢者優先だった。しかし、世界的な
経済格差、地球温暖化、宗教的な対立抗争など
から、女性差別や女性の、特に高齢女性の貧困
は到底解消しそうにもない。二十一世紀、二十
二世紀に、魔女や山姥と同様の姿がまたしても
現れてくるかもしれないと、ひそかに心配して
いる。

まつだ・のりこ 1964年～1982年に
東京新聞婦人家庭部記者。高齢者、消費者、女
性労働問題を担当。その後、約3年間、旧西独
に居住。帰国後、フリーで執筆。昭和女子大、
國學院大學で非常勤講師を勤め、「魔女の目でみ
た暮らしと経済」ドメス出版をまとめた。また、
故・山室静氏主宰の同人誌『海賊』の取材をき
っかけで入会、田中まる子の筆名で、魔女もの
ファンタジーを書き続けている。

神様がくれたような

桃井 恒和

もう会うことはないと思っていた相手と偶然
のように再会した経験は、たぶん誰にもある。
絵本画家安野光雅さんの自伝には、小学二年の
とき隣の席だった「つえ子」という少女が登場
する。母のいないつえ子は色が変わるほど洗い
古した服をいつも着ていた。鉾山事故で視力を
失った父親は琵琶法師の恰好で家々を祈祷して

回っており、そういうとき行き帰りに父と自分を杖でつないで父の目の代わりになるのが彼女の仕事だった。だから「つえ子」というのも本当の名前ではないだろう。

彼女とは三年でクラスが別れ、以来会うことはなかったが、六十年後テレビの撮影がふるさとであり、誰か会いたい人とは訊かれたのがきっかけで「ご対面」が実現した。つえ子さんは、ずっと農業を続けて男の子を四人産み皆大学まで行かせた、今は畑を荒らしに来るイノシシのほかに心配なことはないなどと話した。それを聞いて、同級生にははるかに裕福だった子が多いけど彼女より幸せだと言える者が何人いるだろう、と安野さんは考えたという。

私の場合その同級生とは、偶然がいくつも重なったような再会だった。

おとしの初夏、私は気持ちの良い青空に誘われ、六十年前に卒業した小学校へ行ってみようとふと思い立った。家からは、同じ横浜市内とはいえバス、電車、そしてまたバスと乗り継いで一時間ほどかかる。大通りでバスを降り、住宅街を真っすぐ約二百メートル入った奥に母

校はある。

そのあたりを訪ねるのはそれこそ何十年ぶりかだった。昔の校舎はとつくに建て替えられ、玄関の場所も変わっていた。

周辺をひとあたり見て回った私は、バス停へ戻ろうとして、来たときとは違う裏の細道へ何の気なしに足を踏み入れた。左手の「○○」という表札に、同級生にも同じ名前のがいたなど家の方を見ると、ガラス戸を開けた窓辺に男が立ってこちらにじっと目を向けている。私はその瞬間、あの○○君だ！とかまわず庭へ入り込んでいた。

同級の彼なら、三十代のころ一度だけ通勤車で出会ったことがある。そのとき川崎のデパートに勤めていると聞いたのを思い出し、「××デパートに勤めてた○○君だよな。オレ桃井」と近づいて行ったが、相手は「桃井？ 桃井ならおぼえてるけど」とキョトンとするだけ。それは、歳を重ね私が彼の記憶にある顔とかなり違っていたのと、彼の勤めていたのが私が口にしたのとは別の川崎のデパートだったからだ。だがそんなやり取りがあって間違いなく私だと

わかると、「そうかあ」と家に招じ入れた。

彼の所には、結局一時間以上いた。七人きょうだいの末っ子だったが二番目の姉と自分しかもう残っていない、デパートを定年で辞めたあと何年か高速道路の料金所のアルバイトをしていた、などと彼はこれまでを語った。そして、小学校の担任の影響でバスケットにはまって強豪と言われた高校では小柄ながら部のキャプテンを務め、卒業後に職場の同僚となった奥さんから初めて貰ったプレゼントもバスケットのボールだった、ということまで話した。贅沢など縁がなくても幸せな老夫婦に見えた。

帰り際、互いのアドレスを交換しながら私は「なぜきょう何十年ぶりかでここへ来る気になって、何でこの小径に入り、君がどうしてあのとき外を見ていたのだろう」と言い、彼は「いつもなら外を見ても人が通れば目をそらすのに、不思議だな」と返してきた。神様がくれた偶然のような気がした。家に戻ると、へ君と別れたあと嬉しくて涙が」とメールが来た。

小学校の同級生は年に一度、男女二十人ほどで集まっている。私はそのときの集合写真を送

り、君も出て来いと誘った。返事は「記憶にあったのは五人だけ。気後れしそうだからやめておくよ」だった。

だが、しばらくして――。

こちらの送った写真に自分の近影を乗せ合成した画像が、パソコンに届いた。へ撮影日に休んだ児童の顔が同級生たちのそばに丸枠で添えられた卒業アルバムを思い出したので、とあった。

もい・つねかず 1946年生まれ。読売新聞の社会部長、東京本社執行役員などを経て、2004年から16年まで読売巨人軍の社長や会長。著書に『スコアブックの余白』『使うあてのない名刺』。

猫

吉岡

純子

朝の散歩で出会う野良の親子がいた。母親のおっぱいを追っかけ、三匹のチビ猫がチヨコチヨコ走り廻っている。

野良一家の行く先を案じる、同世代の山田さん。私が猫好きと知って、「一匹でいいから助けてやって」と何度も頼まれるようになった。

飼うことについては、私の感化で猫好きにな

った夫を説得するには問題なかった。だが、仔猫の将来を考えると、最期を看てやれるかどうか。日本人の寿命が長くなったとはいえ、仔猫の先行き十数年後が心配である。

たまたま電話をかけて来た息子にこの話をすると、「その時は俺ンちに引き取るから大丈夫」と言う。

岡山と東京の距離を思えば安請け合いもいいところだ。へ五十歳近くなってもこのお調子者、と独りごちたものの、背中を押されたようで、踏ん切りがつき、結局は見切り発車となった。まあ親も親でいいかげんな性格だ、と反省もしている。

さて、我が家が引き取った生後三カ月くらいのチビ猫は、仔猫用キャットフードをよく食べ、トイレをしくじることになった。

見た目は可愛いこの仔猫、野良根性だけは揺るぎないものを持っていた。慣れるまでの一カ月余りを、私は昼夜なく振り回わされたのである。

家の中だけで飼っているのに、たびたびの雲隠れに家中を探しまわった。その挙句、サイド

ボードのうしろ、冷蔵庫のうしろ、と想像もつかない狭い暗闇に、身動きもしないでうずくまっていた。

あるときは、夜中の二時に本棚の上から下へと狂ったように駆けまわった。

早朝、二階から降りようとすると、階段の下から「フウー、ウー」と、すさまじい威嚇の挨拶。そして夜のとばりが降りると、「ここから早く出してエ、野良に帰えてエ」と、ガラス戸の向こうの闇の世界へ鳴き叫ぶ。

様々な脅しに遭いながらも名前を考えた。アメリカ生活が長かった夫は、「ジョージやら、マイク、フレッド」と威勢のいい名前を書き上げた。だが、短毛の、藤虎模様の元野良には、どうにもしっくりこない。

やっと「タマ」と決まったのは、女の子と違っていたのに、玉があって驚いたのが名前の由縁である。

「タアマちゃん」と呼べば、自分のことと認識して、「ニャーオ」と応えるようになった。そのころには、抱っこされるのが好きになり、腕の中でやわらかく撫でてやると、私を見上げて

小さな体をふんわり預けてくるようになった。

これを目にした夫、自分の部屋で一緒に遊びたいと渴望するものの、まるでそっけなく身をかわずタマ。私のように、「猫撫声であやせば解決するのよ」と言っても、夫のそれは武骨で、仔猫に通じるには時間がかかりそうだ。

タマが家にきてから数カ月後、去勢手術が無事に終わった。

季節は夏から秋に移って、虫の音が身に染むようになってきた。

ときを思うのだが、タマが私たちを理解してきたのだろうか。反対に、私たち夫婦がタマの野良性に慣れてきたのだろうか。いや、きっと両方がないまぜになって落ち着いてきたのだ。

振り返ってみると、長期間に亘るコロナ禍で、心身ともに萎縮した生活が当たり前となっていた。人も少しの野良性を持ち合わせると、世の中も面白くなるのでは、と元野良を飼いながら思っている。

よしおか・じゅんこ 1943年大阪生まれ。
大阪樟蔭女子大学卒業。夫の転勤でアメリカ東

部（ニューヨーク、ニュージャージー州）とい
リノイ州で生活。アメリカ生まれの子どもたち
は現地の学校、補習校、日本人学校で伸び伸び
と育ったが、帰国して、中学、高校生活に適応
するのが大変だったのを鮮明に覚えている。俳
句を楽しんでいる。

のちの世に残すもの

吉原

賢二

ことわざに「虎は死して皮をとどめ 人は死
して名を残す」とあるが、名もなく朽ちるのは
口惜しいことではないだろうか。自慢話ではな
く、残すに価することは人の一生の中にきつと
あるものだ。

私の生涯の中でもっとも忘れられないことは
二男充（みつる）のインフルエンザ予防接種事
故だった。活発で利発そうな子だったし、だれ
にも愛されていたのに、1歳1ヶ月のとき受け
た汚いワクチンのために生涯重度の心身障がい
者となってしまった。そして36年の短い一生を
終った。知能は測定できないほど低く言葉も話
せなかった。

しかし彼は音楽に反応し、時にしずかに聞き
入り、時に手足をバタバタさせて喜びをあらわ
すのだった。それを見るたび、親心は天国の幼
児を見たかのように癒された。

国はこの種の事故に対して冷たかった。戦後
数十年の間に数千人の事故が発生し、親たちが
苦しんでいるのを放置していた。被害者たちは
結束して団体を作り厚生省（現厚生労働省）に
訴えたが満足な答えは得られなかった。問題を

担当する委員会も一向に進展せず、被害者家族はいら立ってばかりだった。裁判をうながす委員も現れた。もはや裁判にかけるはかなかった。

国家賠償法訴訟は約20年もかかった。私ども被害者の団体は互いに助け合って長い日々をすごした。幸いだったのは弁護士や裁判官の理解があったことである。人権感覚にすぐれた中平弁護士や大野弁護士（のち最高裁判事）にはいくら感謝しても足りない。

訴訟は最終的に被害者家族全員の勝訴で決着した。すべてが終ったあと、わが家の二男充は2000年6月の朝、眠るがごとく亡くなった。安らかな最期であった。仙台市郊外の墓には「この生命は人の光」と記された。充の生涯を記念するものだった。

よしはら・けんじ 1929年、新潟県新潟市に生まれる。53年、東北大学理学部化学教室卒業。61年、理学博士（東北大学）。放射化学の分野でもホットアトム化学と呼ばれる領域で国際的評価を得る。82年、東北大学理学部化学科教授。96年、「いのちの尊厳を考える会」を

設立。二男のインフルエンザ予防接種禍を契機に、予防接種の安全および被害者救済の運動を起こし、20年に及ぶ国家賠償法訴訟に勝訴。2008年、新元素ニッポニウムの実在を突き止めて化学史学会学術賞を受賞。東北大学名誉教授。



候補作品ご推薦のお願い

来年2月に依頼状を発送

来年度の第70回日本エッセイスト・クラブ賞の審査基準は下記のとおりです。本年4月1日から来年3月末日までに、初版として発行された単行本が対象です。来年2月に、会員および出版社に推薦願いをお送りしますので、候補作のご推薦をお願いします。

審査委員長は秋岡伸彦氏です。

今年度の日本エッセイスト・クラブ賞のご推薦は会員による推薦作品25点、出版社の推薦作品92点、個人応募10点、合計127点でした。

審査基準

一、2021年4月1日より、2022年3月31日までの間に、初版として刊行された書籍とする。

二、クラブの正会員（個人会員）の作品、および共同著作は原則として審査の対象としない。ただし、入会の翌年度から5年以内に発表した作品は審査の対象とする。

三、著者の国籍は問わないが、日本語で書かれたもの。（翻訳は不可）

四、新聞、雑誌等に掲載され、その後出版されたものでもよい。

五、他の類似の賞を最近受賞されている方、およびすでに文名を広く知られている方の作品は除く。

六、随想、評論、ノンフィクション、伝記、研究、ドキュメント、旅行記など、エッセーを広い範囲でとらえ、特に新鮮で感銘を覚える新人の発掘に努める。

第70回日本エッセイスト・クラブ賞

審査委員長 秋岡 伸彦

事務局から

ご寄付のお礼

2021年7月から11月6日まで
に、次の会員からご寄付をいただきました。
ご芳志のほど、心からお礼
申し上げます。（順不同・敬称略）

維持会費

中村登紀夫

特別維持会費

齋藤健次郎

中村 龍介 よしだみどり
古川 治次 加藤 恭子
太田 愛人 降幡 賢一
砂原 和雄 大高 英昭
秋岡 伸彦 紺野 猷邦
森 小夜子 戸田 淳子
秋田 博 森 孝之
山川 静夫 佐々木満里子
出久根達郎 山室 寛之
森脇 逸男 今野 耕作
飯塚 恆雄

道脇 弘俊	栗生 将信	海老沢 小百合	穂苅 正臣	城山 邦紀	並木よう子	及川 直志	戸田 桂太	岩瀬 達哉	藤原 房子	塩谷 靖子	森本 貞子	野中 康行	柳川 時夫	尾崎左永子	杉溪 一言	柳澤 桂子	河合 弘之	杉戸 大作	大槻 茂	森本 雍子	澤地 久枝	村尾 清一	脇 祐三	齋藤 健
若林 滋	内藤 啓子	原田 國男	秋山 秀一	遠藤 利男	高島 肇久	久我なつみ	佐藤 きむ	萬年 浩雄	白井 和恵	松本 仁一	岡田恵美子	東畑 朝子	金子 光美	青木 賢児	坂口 和子	小泉 清	大井 玄	佐藤 幸子	小林 和男	足立 則夫	杉江 弘	堀尾眞紀子	中名生正昭	谷村 鯛夢

クラブ賞賛助金

新たに、クラブ賞協賛金として、
日本みらいホールディングス株式会
社（代表・安嶋明氏）から100万
円のご寄付をいただきました。

新会員推薦のお願い

会員一名の推薦でも審査

当クラブの新会員をご推薦くださ
い。クラブの一層の活性化をはかる
べく、ぜひ新しい仲間たちを迎えた
いと存じます。お知らせなど、
会員にふさわしい方をご紹介くださ
るよう、皆さまのご協力をお願いし

ドリアン助川	永井 梓
吉行 和子	深尾 凱子
長屋 龍人	大宅 映子
畑 正憲	小塩 節
又吉 國雄	中山 士朗
加固 康二	

ます。

クラブ定款第7条にありますように、正会員となるには、現在の正会員2名以上の推薦を得て、理事会の承認を求めることになっています。

この「2名以上の推薦」という原則は変わりませんが、会員1名の推薦でも、理事会に申請していただければ、審査の対象とします。理事会推薦によって、規約の要件は十分に満たすことができます。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論、ノンフィクションなど幅広い分野を対象にしています。著書や新聞・雑誌などのお仕事を参考に、クラブの趣旨に即して、理事会で審査します。

10月現在の正会員は212名です。従来通り年会費1万5千円で、入会金などは不要です。クラブの運営にとって、会費収入が大きな頼りであることは言うまでもありません。入会推薦の用紙などはクラブ事務局に用意しております。

なお、毎年のクラブ賞審査で、原則として正会員の作品は対象外ですが、入会の翌年から5年以内に発表した作品は対象になりますので、申し添えます。
(理事会)

会員からの寄贈著書

飯塚恆雄氏著『ニッポンのうたの夢織人たち』

同 氏著『ジョバンニの切符をさがして』

久我なつみ氏著『文豪と異才たち 井原西鶴から村上春樹まで小説ブームをおこした人々』

尾崎俊介氏編『エピソード アメリカ文学者大橋吉之輔エッセイ集』

堤 未果氏著『デジタル・ファシズム 日本の資産と主権が消える』

鍋島高明氏著『著名人の投資歴II エピソードでつづる81人』

岡佳津子氏著『ちよっと寄り道 目の散歩 VOL.21』

国正武重氏著『日本政治の一証言 社会党と土井たか子の時代』(ご家族より寄贈)

(7月中旬から10月中旬まで)

ご寄贈と自著紹介のお願い

刊行から概ね1年以内を目安に、ご著書の紹介を事務局あてに随時、郵送、FAX、メール等でご送稿ください。紹介の本文は著者名、著書名は別にして、250字程度。また本文とは別に出版社・価格を付記願います。会員近況(80字ほど)も合わせてお寄せ下さい。

2021年度理事会報告

第1回常務理事会(21年10月12日)

- ・ 会員現況
- ・ 2021年度上半期の収支報告
- ・ 審査委員会について

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目指すとし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならない。

第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

(1) 理事 15名以上25名以内

(2) 監事 2名以上

2

理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によって、理事の中から定める。

3

会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

(1) 当法人の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章 計算(略)

第7章 清算(略)

第8章 附則(略)

役員名簿

会長	遠藤利男				
理事長	(空席)				
専務理事	秋岡伸彦				
常務理事	栗田 亘	原田 國男			堀尾眞紀子
	よしだみどり				
理事	秋山 秀一	梅津時比古			高村 壽一
	土井成紀	中丸 美繪			深尾 凱子
	藤原 作弥	藤原 房子			降幡 賢一
	松田 宣子	森脇 逸男			
監事	大高 英昭	今野 耕作			
事務局長(兼)	降幡 賢一				
名誉会長	村尾 清一				
	*	*			*

会 員 名

(2021年10月25日現在 276名)

五十音順

あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
足立 則夫	有馬 真喜子	五十嵐 佳子	井口 隆史	池内 紀昭
池谷 薫	伊野 啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦	市川 桃子
市田 隆文	稲畑 汀子	猪熊 建夫	岩瀬 達哉	上田 篤
上野 創	上野 誠	白井 和恵	鶴飼 哲夫	内池 正名
内田 洋子	梅津 時比古	浦田 憲治	海老沢 小百合	榎本 好宏
遠藤 利男	小川 津根子	小倉 董子	小澤 秀雄	小塩 節
小曾 戸明子	尾崎 左永子	尾崎 俊介	及川 直志	大井 玄
大塚 義治	大岩 孝平	大城 浩詩	大空 博	大平 常元
大高 英昭	大谷 克弥	大場 司	大村 智	大宅 映子
太田 愛人	岡 佳津子	岡島 成行	岡田 恵美子	岡田 直敏
奥山 俊宏				

か行

加固 康二	加藤 恭子	加藤 貞仁	柏 澄子	勝方 信一
金森 敦子	金子 光美	亀田 泰武	軽部 謙介	河合 弘之
川田 志明	川良 浩和	菅野 光公	北原 歌子	城山 邦紀
儀同 保	菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北野 栄三
北村 行孝	久我 なつみ	久谷 與四郎	轡田 隆史	倉部 行雄
倉本 宗剛	栗生 将信	栗田 亘	栗山 定幸	黒川 鍾信
古庄 ゆき子	小池 光	小池 英夫	小泉 清	小谷 瑞穂子
小林 和男	小松 浩	児島 宏子	後藤 秀機	今野 耕作
紺野 猷邦				

さ行

さだ まさし	佐々木 健一	佐々木 卓	佐々木 満里子	佐田 智子
佐藤 きむ	佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保 田芳訓	斎藤 勇
齋藤 健	齋藤 健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子
坂本 政謙	坂本 弘道	澤口 たまみ	澤地 久枝	澤藤 範次郎
三宮 麻由子	志村 ふくみ	塩谷 靖子	下重 暁子	下村 満子
杉江 弘	杉溪 一言	杉戸 大作	杉山 武子	鈴木 章一
鈴木 博	砂原 和雄			

た行

田中 トモミ	田中 伸尚	田中 秀一	田中 實	田沼 敦子
田村 秀敏	田谷 麗子	田和 潤子	高井 潔司	高木 徹
高榎 堯	高階 經和	高島 肇久	高橋 祥友	高村 壽一
竹内 一正	竹中 淑子	武本 宏一	谷地 快一	谷村 鯛夢
俵 万智	柘野 健次	辻 由美	堤 未果	鶴ヶ谷 真一
D・ゾペティ	出久根 達郎	ドリアン 助川	土井 成紀	戸田 桂太
戸田 淳子	鳥羽 欽一郎	東畑 朝子	当銘 貞夫	徳田 正幸
富永 孝子	富山 和子	鳥海 修		

な行

内藤 啓子	中島 さおり	中野 利子	中名 生正昭	中丸 美繪
中村 史郎	中村 登紀夫	中村 政雄	中村 龍介	中山 士朗
永井 梓	長井 好弘	長田 亮一	長友 佐波子	長野 安恒
長屋 龍人	並木 きょう子	二宮 正之	蜷川 真夫	縫田 曄子
野中 康行	野見山 曉治			

は行

葉山 美知子	羽中 田 昌	畑 正憲	畠山 重篤	濱邊 祐一
原 彬久	原田 國男	林 望	樋口 恵子	廣野 眞一
深尾 凱子	福田 章	福田 はるか	福原 義春	藤原 勇彦
藤原 作弥	藤原 房子	藤原 正彦	船木 拓生	降幡 賢一
古川 治次	古川 浩	穂苅 正臣	細川 俊夫	堀尾 眞紀子

ま行

前田 晃伸	牧 久	牧村 健一郎	正籬 聡	又吉 國雄
町田 邦雄	松田 宣子	松本 仁一	萬年 浩雄	三島 利徳
水谷 亨	道川 文夫	道脇 弘俊	南 砂	宮本 倫好
宮崎 佳代子	村尾 清一	村松 賢一	望月 照彦	桃井 恒和
森 小夜子	森 孝之	森 武生	森 哲志	森本 貞子
森本 雍子	森脇 逸男			

や行

八百板 洋子	八木 美雄	安嶋 明	柳生 尚志	柳澤 嘉一郎
柳澤 桂子	柳川 時夫	柳田 由紀子	山川 静夫	山形 孝夫
山岸 健	山口 寿一	山口 伸美	山下 健	山藤 章二
山室 寛之	山本 一生	山本 思外里	よしだ みどり	養老 孟司

横山 昭作 吉岡 純子 吉野源太郎 吉原 賢二 吉行 和子

わ行

若林 滋 脇 祐三 渡辺 綱纜 渡辺美佐子 渡邊 満子

法人会員（順不同）

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	NHK 出版
産業経済新聞社	集英社
日本経済新聞社	
中日新聞社	
共同通信社	
日本放送協会	
TBS テレビ	

日本エッセイスト・クラブ事務局



会報 2021 冬 (No. 73 | II)

2021年11月25日 発行

発行人 遠藤利男

発行所 一般社団法人日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋 1—18—2

明宏ビル別館6階 T105-0004

電話 03(3502)7287

FAX 03(3502)7288

<http://essayistclub.jp/> ホーグーバー

Eメール info@essayistclub.jp印刷所
(株)TBSグロウディア

古今東西の名著、その核心を読み解く——。大好評の愛蔵版！

NHK「100分de名著」ブックス

定価 各1,100円(税込) ★は定価 1,430円(税込) *各四六判 並製

ドラッカー マネジメント	上田惇生
孔子 論語	佐久協
ニーチェ ツアトラウストラ	西研
福沢諭吉 学問のすゝめ	齋藤孝
アラン 幸福論	合田正人
宮沢賢治 銀河鉄道の夜	ロジャー・パールバス
ブッダ 真理のことは	佐々木閑
マキャベリ 君主論	武田好
兼好法師 徒然草	荻野文子
新渡戸稲造 武士道	山本博文
パスカル パンセ	鹿島茂
鴨長明 方丈記	小林一彦
フランクフル 夜と霧	諸富祥彦
サン＝テグジュペリ 星の王子さま	水本弘文
般若心経	佐々木閑
アインシュタイン 相対性理論	佐藤勝彦
夏目漱石 こころ	姜尚中
古事記	三浦佑之
松尾芭蕉 おくのほそ道	長谷川 權
世阿弥 風姿花伝	土屋恵一郎
万葉集	佐佐木幸綱
清少納言 枕草子	山口仲美

紫式部 源氏物語	三田村雅子
柳田国男 遠野物語	石井正己
ブッダ 最期のことは	佐々木閑
莊子	玄侑宗久
岡倉天心 茶の本	大久保喬樹
小泉八雲 日本の面影	池田雅之
良寛詩歌集	中野東禪
ルソー エミール	西研
内村鑑三 代表的日本人	若松英輔
アドラー 人生の意味の心理学	岸見一郎
道元 正法眼蔵	ひろさちや
石牟礼道子 苦海浄土	若松英輔
歎異抄	釈 徹宗
ユゴー ノートルダム・ド・パリ	鹿島茂★
サルトル 実存主義とは何か	海老坂 武
カント 永遠平和のために	萱野稔人
ダーウイン 種の起源	長谷川眞理子
アルベール・カミュ ペスト	中条省平
バートランド・ラッセル 幸福論	小川仁志
三木清 人生論ノート	岸見一郎
法華経	植木雅俊
宮本武蔵 五輪書	魚住孝至

